わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―― 111

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

貧困とユーモア

「貧困率」というあまりなじみのない言葉がある。

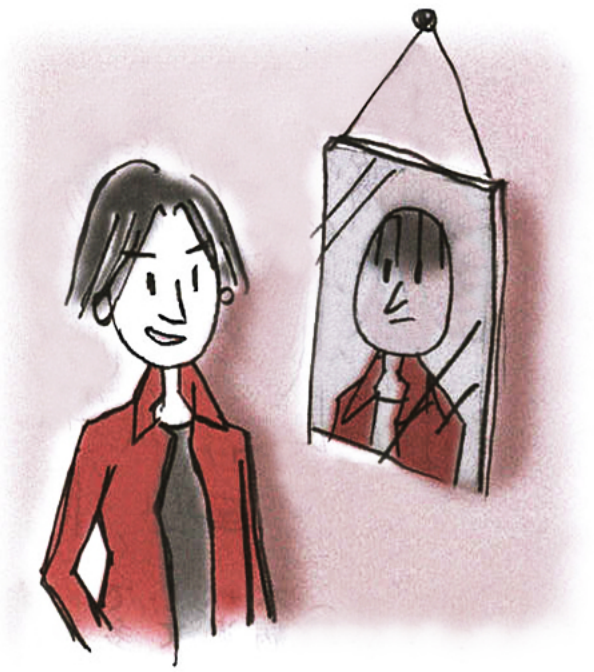
これまで、貧困の指標として一般的だったのはOECDの調査で使われる「相対的貧困率」だ。これはひとりひとりの国民の収入から社会保険料や所得税などの直接税を除いた所得を多い順に並べ、中央の人の半分に満たない人が全体でどのくらいいるのかを示すものだ。2009年、日本では中央の人の半分の所得は112万円、つまりはこの額に満たない人の割合ということになる。

2009年の日本の相対的貧困率は16・0％と2007年よりもさらに悪化し、国際比較では加盟国34か国中下から6番目という数字であった。ちなみに、貧困率がもっとも高いのはメキシコであり、次いでイスラエル、チリ、アメリカ、トルコ、そして日本である。もっとも低いのはチェコ、次にデンマーク、ハンガリーと続く。

日本では何となく貧富の差が小さいとのイメージがあったが、改めて日本の貧困がじわじわと進んでいる事実は衝撃を与えた。

生活保護受給者が過去最高、あるいは非正社員の増加などの世相を考えると、所得だけで判断するこの貧困率では実態を反映していないのではないかとの疑問がわく。…と思っていたら、日本独自の指標をつくる動きがあることがわかった。

報道によると、所得のみならず健康状態や衣食住の状況も含めた貧困を把握するために「食事に困っていないか」「携帯を買えるか」などの生活状態をあらわす項目も検討されているという。どんなことでも実態や真実を数字に置き換えることには限界があるものの、少しでも貧困対策が進むよう、真に困っている人々のためになるよう、早急な導入を期待するところである。



しかし、世の中にはわざと携帯を持たない人もいる。「買えるか買えないか」と「買えるけど買わない」とは全然違う。2011年にはアナログ放送が終わり、デジタル放送に全面的に切り替えられたが、私の知人にもこれをきっかけにテレビを持たないと決めた人が結構ある。それほどまでにして観たいテレビ番組がないということが理由のひとつである。これもやはり「買えるけど持たない」に入るだろう。

貧困か貧困でないかを判断するのはとても難しいのではないだろうか。たとえお金やモノがなくても幸せな日々を送っている人はたくさんあるし、もちろん逆も有りうる。貧困イコール不幸というわけではないにしろ、貧困という言葉にはどうしても金やモノがないことのみを感じさせる。

どんな状況でも、それを受け止める人々の心のありようによって目の前の風景はがらりと変わる。みずからの体験をもとに前向きながん患者を描いたカナダ出身の俳優兼監督のセス・ローゲンは「私はがんを宣告されたことがある。毎日鏡を見ると、そこには髪も眉毛もない青ざめた自分がいて、ゆで卵みたいだとふと思う。そこで笑う人もいれば泣く人もいる。私は笑うほうを選んだ」と語っている。今もっとも求められているのはこういう類のユーモアなのだと思う。ちなみに映画のタイトルは「フィフティ・フィフティ」、必見です。